

ヴェトナム戦争期の名古屋における脱走米兵支援活動

岩間 優希*

A History of Citizen Assistance to US Deserters in Nagoya during the Vietnam War

Yuki IWAMA *

1. はじめに

1-1. 目的と研究背景

ヴェトナム戦争の時代、在日米軍基地からの脱走兵を日本の市民が匿い、いくつかのケースでは密出国させることに成功した。日米政府の監視をかいくぐり対ヴェトナム政策に打撃を与えたこの活動は、市民による反戦運動の歴史において特筆すべきものである。本稿の目的は、名古屋を中心とする中部圏において脱走兵支援活動がいかに展開したかを記録し考察することである。

日本での脱走兵支援の主導者は、作家の小田実や哲学者の鶴見俊輔らが開始した反戦運動「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)の派生組織、「ジャテック」¹⁾であった。東京を基盤として誕生したジャテックは次第に日本各地にネットワークを広げ、1967年から1971年までの間に脱走兵が滞在した地域は、判明しているだけでも27都道府県になる [関谷・坂元編：1998]。

脱走兵支援の意義について、近代国家を背景とした思想的文脈を論じる紙幅はないが、この運動の中心的人物の一人である高橋武智の功績に対し、アメリカ政治学者の平田雅己が述べる次のような評価を本稿は共有している。すなわち、「平和や人権を擁護するために時として法を破らなければならない場合もある、という「市民的不服従」原理」は、「日本の戦前の運動においてそういう原理で行動された方もいますが、これを広く大衆運動の原理として昇華させたのがベ平連」なのである [平田：2017]。つまり、脱走兵支援は「兵役」と「国境」という、国民国家の本質である二つの制度を侵犯するものであったが、それが広く大衆運動の水準で行われたことに意味があると筆者は考える。だとすれば、個々の具体的実状を検証することが求められるだろう。

しかしながら、同活動は特性上、記録を残さないのが鉄則であり、極秘で遂行されるとともに自らの役割が終了した後も口外せず、また他の協力者の動きを知ることもないのが通例であった。1998年、支援に参加した当事者の回顧集『となりに脱走兵がいた時代』(関谷滋・坂元良江編、思

*中部大学国際関係学部

想の科学社。以下、『となりに』と略記)が出版され内実が知られるようになり、また、その時点でなお秘密にされていたことも、高橋武智が2007年に出版した『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……』(作品社)でかなりの程度明らかにされた。

とはいえ、それだけで運動の性格を把握できるかと言えばそうではない。前述の通り支援活動は全国で展開されたが、これまでに発表された資料は東京の動きが大半であり、地域での活動は不鮮明にしか見えてこないのである。同様の資料的制約はベ平連についても存在しており、回顧録やその他の言説が東京の知識人発のもの中心になりがちであることが2000年代初頭に指摘されると[平井:2005]、以降、様々な地域ベ平連の研究が進められるようになった。本稿もこうした立場から地域における脱走兵支援の歴史を記述しようとするものである。その上で、中でも長期間、現地の協力者のみで匿った場所として名古屋の動きに焦点を当てている。これによって、脱走兵支援の東京中心ではない網の目の広がり、同時代における位置をより明確に浮かび上がらせることができると考える。

1-2. 研究方法と分析枠組み

地域の脱走兵支援活動は、地域ベ平連のようにガリ版刷りのビラやポスター、冊子を残してはならず、文字資料から展開を跡付けることは後者に比べて困難である。そこで本稿では、実際に支援に携わった方々に聞き取り調査を実施し、活動の相貌を描いていくことにした。もちろん全体像を明らかにすることは不可能であるため限定的にならざるを得ないが、この活動に対する地域の人々の関わり方を可能な限り記述していくつもりである。調査で得られたオーラルヒストリーも史料として紹介していきたい。

また、分析枠組みとして本稿は、支援のネットワーク形成過程に着目している。これまで中部圏の動きを記した文献としては『となりに』所収の「名古屋での鶴田」があり、これは編者の関谷滋が名古屋グループの主要メンバー四人と、他の協力者五人へのインタビューに基づいて内容を集約したものである。同書では主に「何があったか」の断片的エピソードが綴られており、名古屋での脱走兵支援の概要を初めて記録したものととして貴重である。これに対して本稿の視点は、「名古屋グループの体制はどのようなものであったか」を掘り下げ、そもそもなぜそのようなネットワークが成立したのかを検討することにある。協力者たちの属性にも注目し、グループを構築するに至った要因を読み解いていく。

なお、このネットワークは関係者によって「名古屋グループ」と称されていることから論題を「名古屋における」としたが、実際には愛知県下の他地域や、岐阜などにも活動範囲は広がっている。

2. 名古屋グループの構築

2-1. 脱走兵が名古屋にやって来るまで

まず日本で米兵が脱走し、名古屋で匿うまでの経緯を確認しておきたい。ベ平連のもとに初めて脱走兵の存在が知らされたのは、1967年10月28日のことである。横須賀に停泊中の米空母イントレピッド号から脱走した4人がそれで、新宿の音楽喫茶・風月堂の前で彼らと出会った東大生が、対応に困りベ平連にコンタクトをとったのがきっかけであった。検討の末、ベ平連はソ連大使館の協力を得て横浜港から発つバイカル号に脱走兵を乗せ、ソ連経由でスウェーデンへ入国させること

にした。この計画は成功し、出航後にベ平連が行った記者発表は、会見で上映された記録映画『イントレピッドの4人』とともに衝撃をもたらしている。

その後も次々と脱走兵を匿うことになったが、デモや集会を中心とした従来の反戦運動に支障をきたすことが懸念され、ベ平連とは別に脱走兵支援の専門グループを組織化した。それが「ジャテック」である。それでも当時は外国人が珍しかったため人目を引き、また英語ができる日本人も少なかったため、秘密裏に米兵を匿うことは困難を極めた。一か所に長く置いておくことは負担も大きく、多数の家を転々としなければならなかったが、脱走兵の数は増え続けたのである。

こうした状況の中、関東から名古屋に支援のネットワークを伸ばしたのは、当時、立教大学の助教授を務めていた仏文学者の高橋武智であった。高橋はかねてより参加していた日本戦没学生記念会（通称「わだつみ会」）がベ平連と協同したことからヴェトナム反戦運動にも携わり、そのままジャテックでも中心的役割を果たすようになっていた [高橋・岩間：2015]。関東のみで脱走兵を匿うことに困難を感じた高橋は、1965～1967年までフランス政府給費留学生としてパリに滞在中知り合った愛知大学（以下、愛大と略記）教員の佐々木康之に電話をし、名古屋で匿うことを依頼する。この時、佐々木は活動内容を突然知らされたわけではなく、高橋が行っていた脱走兵支援についてある程度事前に知っていたという。当時を次のように語る。

高橋とパリで知り合って、日本に帰って来てからもずっと付き合いがありました。僕は恋人が、今の女房ですけど、東京にいたのでしょっちゅう東京に行っていて、高橋が奥沢で一人暮らしをしていましたからそこに泊まったりしてたんですよ。そのうちに、「イントレピッドの四人の会」とかいうのが始まって、高橋の家で会議したりしているんですね。僕は当然そこにいたから、オブザーバーとして横で聞いてたりしたんです。僕は別にベ平連に入ってませんが、高橋がそういうことを一生懸命やったのは知っていました [佐々木インタビュー]。

佐々木は高橋の自宅で脱走兵支援に関わる会議が行われた際にも同席しており、内容を把握していたのである。高橋も、それを踏まえて依頼をしたのであろう。こうして、新宿の路上で生れたジャテックの芽が、名古屋へと広がりを見せることになった。

2-2. 中心人物・鈴木鋼二

高橋から依頼を受けた佐々木だったが、特定の社会運動や組織に参加していたわけではなく、自身で受け入れ態勢を整えることは難しかった。そこで考えたのが、豊田市政研究会（以下、市政研と略記）で地域の問題に取り組んでいた鈴木鋼二の存在である。鈴木こそ、名古屋の脱走兵支援運動において重要な役割を果たす人物である。

鈴木は1937年、愛知県挙母町（現・豊田市）の生まれで、薬剤師の父親が薬局を経営しながら戦後、地元で共産党組織を結成したという家庭で育った。鈴木自身も中学生時代から『アカハタ』の配達をしていたほど共産党が身近な存在であった。1956年、愛知県立挙母高等学校（現・豊田西高等学校）を卒業後、東京大学法学部に入学、4年生で60年安保闘争を経験し、卒業後は大学院に行くことが決定していたが、研究者よりも地元で市民運動に携わることを選択した。1961年に名古屋大学（以下、名大と略記）医学部に入学したのは、職を失うことのない医者になるため

あったという。1962年、友人らと市政研を結成していた [鈴木：2017]。

佐々木と鈴木を結び付けたのは、当時、名大で教えていた仏文学者の中川久定である。パリからの帰国後、愛大でフランス語を教えていた佐々木は、自身を愛大に呼んだ仏文学者・大槻鉄男が中川と同級生だったことから中川とも親しくなり、中川ゼミの食事会で同ゼミに参加していた鈴木と知り合うことになったのである。佐々木は次のように回顧する。

中川ゼミっていうのがものすごい面白いゼミで、不思議な人がいっぱいいたんですよ。その代表選手みたいなのが、鈴木鋼二。何で知り合ったかと言うと、中川さんが、中川ゼミのパーティーに僕を呼んでくれたんですよ。そこに行ったら鈴木君が中心になってやってたから。もう議論ばかりです。ものすごい高級な議論してるわけよ。トロツキーの話とかそんなんばっかりしてるんです [佐々木インタビュー]²⁾。

佐々木は、高橋からの依頼を引き受けるとすれば鈴村のネットワークを頼る以外にないと考えた。そこで、その頃は医師として蒲郡市民病院産婦人科に勤務していた鈴村を電話で呼び出し、自宅のあった豊橋の競輪場近くの小川で脱走兵の話を書いた。鈴村は一度「考える」と持ち帰り、後に承諾したという。

他にも協力者が必要だったので、当初、鈴村は市政研の関わりを避け、愛大院生で元県学連副委員長の前村高康の名前を挙げた。同じ愛大の佐々木が学内で前村を呼び出して内容を説明し、同意を確認した上で、脱走兵受け入れが可能である旨を高橋に伝えた [関谷・坂元編：1998]。

2-3. 名古屋にやってきた脱走兵

名古屋で匿われたことが確実に判明している米兵は二人いる。一人は、1968年6月21日にジャテックにやってきたロバート・J・フォリス（日本名、堀川。陸軍4級特技兵）である。彼はすぐに奈良の「交流（むすび）の家」というハンセン病快復者の社会復帰のための宿泊・交流施設に匿われ、7月には京都の北ホテルや他の協力者の家に滞在している。その後、同月中のことであろう、東京から新幹線で名古屋まで行ったことを作家の阿奈井文彦が記している。

フォリスを東京から名古屋まで、新幹線で送り届ける役だった。名古屋のジャテックのメンバーとは初対面だった。あらかじめ電話で打ち合わせ、名古屋駅のホームで互いに「アサヒグラフ」を手にして立っていることにした。

名古屋に到着。ホームの前方から若い男が近づいてくる。手には「毎日グラフ」を持っている。目が合うと、彼は「アサヒグラフ、売り切れてたもんですから」と苦笑し、私も笑って挨拶をかわした [阿奈井：2000]。

この時、名古屋駅に迎えに行った「若い男」が誰かは不明である。しかしフォリスはその後、愛知県下の医師たちの間を転々としているとの噂を阿奈井は耳にし、「ある産婦人科病院に一つ空きベッド（個室）があり、そこにもしばらく匿われていたようだ、とジャテックのメンバーから伝わってきた」と書いている。これは鈴村が勤めていた蒲郡市民病院産婦人科のことだろうか。

フォリスを匿ったことを記憶している人物として、医師の瀬口文暉（よしてる）がいる。瀬口は当時、蒲郡市民病院に勤めており、同僚の鈴木から頼まれて彼を泊めたことがある。しかし、鈴木をはじめ、名古屋グループにはフォリスの記憶が薄い。フォリスに比べ長期にわたり預かった「ジョー」と呼ばれる脱走兵が強烈な個性を持つ人物であったため、フォリスの存在が霞んでしまったようだ〔関谷・坂元編：1998〕。フォリスは9月、他の脱走兵3人とともに根室からソ連経由でスウェーデンへと密出国した。

「ジョー・ハワード」、本名アルバート・L・ブラウン（日本名、鶴田。海軍三等下士）が横須賀海軍基地から脱走したのは1968年12月であった。彼が名古屋で匿われたもう一人の脱走兵である。ミズーリ州に生まれ、1966年に徴兵後、海軍でアーリントン号のボイラーマンとして乗務しヴェトナム戦争に参加した。脱走後は約18カ月ジャテックの保護下にあり、その間に数回、延べ数か月にわたって名古屋で引き受けた。名古屋グループの証言に登場する米兵もほとんどはこの「ジョー」のことである。なお、彼は数いる脱走米兵の中でも「問題児」だったようで、食事や支援者の対応に文句を言い、ガールフレンドを求めてしばしば周囲を困惑させた。もちろん、展望のないまま何か月も転々と隠れ家生活を余儀なくされる中で精神が荒廃するのは当然であり、支援者たちもそれを理解しているからこそ、苛立ちとともに深い同情を寄せざるを得ないのだった。

2-4. 名古屋大学人脈

佐々木が名大のゼミで知り合った鈴木に依頼したのを皮切りに、名古屋の脱走兵支援は名大あるいは鈴木の人脈を中心としてネットワークが広がっていく。佐々木自身は、鈴木に依頼をしたのみで自分はほぼ関与しなかったと語るが、とはいえ、東京から平連の吉川勇一がきた際に迎えに行ったほか、豊橋の自宅で4、5日、愛大が所有していた海岸の家で2、3日ほど匿ったこともあるという〔佐々木インタビュー〕。

鈴木は、滞在場所や協力者の確保などに采配を振るった。米兵の移送や付き添いなどは大学院生であった村山やその仲間が担うことが多く、佐々木の紹介による愛大の学生運動家も手伝いをしたことがある〔諸戸インタビュー〕。

さらに、名古屋の脱走兵支援の中心的協力者の一人には、稲垣喜代志がいる。稲垣は名古屋の出版社「風媒社」の経営者で、原発や戦争責任などの社会問題を論じる作品を多数世に送り出した「戦う出版人」として知られる人物である。1933年に愛知県刈谷市で農家の跡取りとして生まれ、後に法政大学で学ぶ。1953年には学生が全国的に展開した帰郷運動に参加し東海地方を担当。大学を卒業後は『日本読書新聞』の編集を経て帰郷し、1963年に風媒社を設立していた〔鈴木：2017、中日新聞：20171020朝刊〕。

稲垣はどのようにして脱走兵支援に携わるようになったのだろうか。明確な証言はないものの、鈴木との関わりで参加したと見てほぼ間違いのないというのが、今回話を聞くことのできた関係者らの語る場所である。稲垣は、1950年代に鈴木が東大生だった時代から友人関係にあった³⁾。脱走兵支援では車で米兵を別の滞在先に送り届けるなどの役割を果たしたほか、顔の広さを生かして知人宅やその別荘、事務所などの滞り場所を次々に探し出した〔関谷・坂元編：1998、朝日新聞社：20131207朝刊〕⁴⁾。名古屋で匿ようになった初期の頃から関わっていたようである。

他に、長期にわたって脱走兵の付き添いを務めたのは諸戸信彦である⁵⁾。学生で時間のあった諸

戸は、最も長くジョーと時間を共にした人物だと言ってよいだろう。1946年に名古屋で仕立て屋の両親のもとに生まれた諸戸は、脱走兵に関わった当時は22歳前後であった。岐阜大学の工学部機械科に在籍する学生で、それ以前から日韓条約やヴェトナム戦争反対のデモや集会によく参加していた。支援活動について、当時は名前や地名など何も覚えなない、メモも残さないことが鉄則であったため、記憶も曖昧な部分が多いという。しかし、関与のきっかけが松本繁世からの誘いであったことは間違いないと語る。諸戸のいう松本繁世とは、1969年3月まで名古屋大学医学部に在籍、以後、名古屋大学付属病院、江南市昭和病院等で研修をしていた医師である。学生時代には中核派のリーダー格であり、デモの際に販売していた機関紙『前進』を諸戸が購入して以来の仲であった。諸戸自身は特定のセクトに所属していなかったものの、松本との付き合いから中核派に対して共感を持っていた。

脱走兵への付き添いを引き受けた明確な時期は不明だが、諸戸自身は、自分の関与前にすでに別の人間が付き添いをしたこともあり、全くの初期からではないと認識している。当時の心境を次のように述べた。

どこか知らないけど山の方へ [付き添いで] 行ったんです。それでおしまいになるくらいのもりだったけど、そこで周りを見渡すと、そんな付き添うような学生、付き添うような人は誰もいませんということが、1週間か10日でわかっちゃったわけ。そういうふうなんだ、人なんかいないんだ、と (笑)。あとは成行きですね。成行きで、あとはずっと基本的に私が付き添いました。何となく断続的に、1年ちょっとやったかな、という気がします [諸戸インタビュー]。

ジョーが要望する無理難題を毅然と拒否したこともあり、「ストロング・コミュニスト」と罵られることもあったが、室内で何か月も過ごさねばならなかった彼に対して同情の思いが強い。

他にも、単発で手伝う多くの協力者に支えられていた。西寺雅也もその一人である。彼は脱走兵支援への関与をこれまで明かしたことはなかった。1971年に多治見市議会議員に当選後長らく議員を務め、1995年から3期12年にわたって多治見市長として同市の改革を率いてきた人物である。匿った当時は名大理学部を卒業して塾を経営しており、その体験について次のように語った。

1月3日が日明けくらいから1週間ほど世話しました。あるいは年をまたいだのかもしれない。記録に残していないので細かいことは覚えていませんが、人間関係を考えるに、鈴木さんに頼まれたとしか考えられないですね。場所は藤山台の住宅公団 [高蔵寺ニュータウン] のアパートの一室。鈴木さんのお友達の家で、入居前でした。一番奥の北の建物だったので、あまり目立たなかったんです。そこで雪合戦をした思い出があります。次の人のところへ連れていくため鹿乗 (かのり) 橋のたもとで深夜、米兵の引き渡しをしました [西寺インタビュー]。

西寺も名大時代、中川久定のゼミ (コンパ) に参加しており鈴木と親しくなった。特定のセクトには入らず佐世保闘争などに参加していたが、鈴木との出会いが政治活動を続ける発端となり、その後も多治見で自治体運動を行っていた。結成した「多治見市政に新しい波を」市民の会の名称は、ベ平連にあやかっただけのものだ。

ジョーを匿っている最中は塾の教え子である高校生と大学生が遊び相手をし、車を持っていた大学生が駅からアパートへメンバーを運んだ。7名ほどで入れ替わり世話をしていたという。西寺が預かったのが1969年の年明けもしくは年をまたいでだとすれば、ジョーが脱走したのが1968年12月のことであるから、かなり早い時期だったということになる。あるいはもちろん、1970年の年明けであった可能性もある。

さらに、『となりに』編者の関谷滋は、「名古屋の協力者には医師が目立って多い」と書いている。これも鈴村の人脈である可能性が高い。前述の瀬口、松本の他、地元で名の知られていた医師の森下圭二にも協力を依頼している。森下は他にも協力者を紹介したり、信州・白馬にある民宿やカンパも提供することで運動を支援した。ただし森下の場合は年齢もかなり上であり（1913年生まれ）、愛知県平和委員会の理事を務めるなど社会運動の世界で著名人であったことから〔愛知県編：1985〕、鈴村の医師としての人脈ではなかったかもしれない。

こうして脱走兵支援ネットワークの基盤が見えてきたわけだが、『となりに』には登場しないが積極的に関与した人物が他にもいる。それを次項で見て行きたい。

3. オカダ印刷周辺の人々

3-1. 渡久地政司

渡久地政司も、脱走兵支援に奔走した一人である。渡久地は1937年、大阪で生まれた。両親は沖縄県国頭（くにがみ）郡の出身で、メッキ工場で働く職人であった父は1937年のトヨタ自動車工業の設立に伴って38年に入社、後に中国の天津工場、戦後は拳母市（現・豊田市）へと移った。1957年から愛大法経学部でマルクス主義を学び、在学中に日本共産党に入党したが、1962年、豊田原水協を代表して東京大会に出席中ソ連が核実験を行い、これに反対して脱党する。卒業後は地元の加茂タイムス社（現・新三河タイムス社）で記者をした後、1963年4月から1987年4月まで24年間、愛知県豊田市議を務めた。つまり米兵を名古屋で預かっていた時期には公職に就いていたことになり、そのこともあって長らく脱走兵支援については語ってこなかったのだ。だが、実際には滞在先の確保や資金集めなどで関わりを持った。

渡久地の関与も鈴村の依頼が発端である。二人は拳母高校時代からの友人で、鈴村が「拳母平和を守る会」を結成した際に勧誘されたり、鈴村が配達していた『アカハタ』を購読したりするという仲だった。交友は鈴村が東大にいる間も続き、その後、1962年夏にはともに市政研を結成している。脱走兵支援への参加を求められた時のことを次のように語る。

鈴村が「こういうことやりたいんだけど」、と言うから「いいよ」ということで手伝うことになりました。ただ、「いいけど、そういう秘密の話は、こっちは表に出ている人間だしやばいから。学生運動の連中とか他に匿っている人間もいるから。だから、言うな」と言いました。「やってもらいたいことだけ言え」と。そうしたら、「じゃあ、お金を集めるのと、場所を確保してくれ」といわれて。それを確保したら鈴村を通してやりました〔渡久地インタビュー〕。

できるだけ全貌を知ることがないように、依頼内容だけを耳に入れるようにした様子うかがえる。渡久地は1998年に『となりに』が刊行された際に他の協力者のことを読むまで、脱走兵支援

の組織構造を非常に大きなものと捉えていたようだ。これについて次のように述べる。

鈴村のバックに巨大な組織があつて、名古屋大学のどこかの、そこがいろいろとやっていて、鈴村は橋渡し役だと思つた。そしたら後から気がついたら、こっちが知っている人ばかりで、何となく誰かかんでるかなとは分かっていたけど、みんな知ってるじゃない（笑）

協力者らは自分以外の活動について把握していなかったが、実はほとんど顔見知りで構成されていたのだ。しかし作戦終了後も長年に渡り話す機会は持たなかった。

渡久地自身は実際にどのような関わり方をしたのであろうか。彼は鈴村に言われた通り、場所の確保のために動いた。渡久地が頼んで脱走兵を引き受けてくれた中には、「瀬戸反戦共闘会議」という、愛知県瀬戸市を拠点とする反戦グループもあつた。同団体は学生運動出身者や芸術家などの若者で構成されおり、渡久地が直接連絡していたのは仲武久という陶芸家である。当時の手帳には「瀬戸、仲」「仲、瀬戸」とあちこちに書かれているが、具体的な内容は何も書かれていないようだ。「仲に聞けばもっと何かわかつたかもしれない」というが、すでに彼も故人である。瀬戸では農村の離れの一軒家で預かつた記憶があるという。

他に、協力的であつた人物として渡久地が挙げるのが、印刷業を営んでいた岡田孝一である。医師で芥川賞作家の小谷剛に援助を依頼したのも岡田だつた。

3-2. 岡田孝一

1927年に名古屋市で生まれた岡田は、1969年当時、オカダ印刷を営み、社会運動団体の冊子やポスターなどの印刷も引き受けていた人物である。もともと朝日新聞中部総局（現・名古屋本社）印刷局労務課に勤務していたが、約半年後に会社の指名で労働組合の専従書記になり、以後、中部地区各新聞社連合組織の青年婦人部長、分会書記長として労働運動に参加した。1946年に団体等規制令が制定され、「素直に従つて、こちらから共産黨員だと登録していた」ところ、1950年のレッドパージで同社を解雇されている。その後は、印刷労働組合の全国組織である全印総連の職員となり、未組織の工場に入って組合をつくる活動に従事、1960年から自営で印刷業を始めていた。戦後間もなくから中野重治の指導の下に政治と文学の運動に参加し、『パルチザン通信』『幻野』『雑談』などの同人誌発行でも知られる〔藤森編：2004〕。

岡田は中部地方の戦後文学に関する中日新聞での連載で、「ベトナム反戦と文学者 米兵の脱走を支援」を取り上げたことがある（1998年2月20日朝刊、後に『中部の戦後文学点描』中日新聞社、1999に収録）。そこでは、「もう30年も前のことで、迷惑をかけるということもないと思うので、名古屋の文学者の間でもこういうことがあつたという記録を書いておきたい」と、脱走兵支援についてのエピソードを次のように明かしている。

相談する人も限られてくるが、文学関係者では亀山巖が親身になって、かくまってくれそうな人を紹介してくれたし、産婦人科の病室をもつ小谷剛には強引に頼みこんだ。小谷はしばらく考えた末に受け入れを承諾してくれた。アメリカのMP（憲兵）や日本の警察の捜査も厳しいので、だいたい一週間を限度として次の場所へ移動するのだが、私はライトバンを運転してこれにあた

った。警察の検問を避けるため、絶対に交通事故や違反をしないよう慎重に運転してくれと事前に注意されており、ハンドルを握る私の手は緊張で固くなっていた [岡田：1999]。

ここで名前の挙げられている亀山巖は、詩人、装丁家、新聞記者として活躍し、中日新聞編集局長や、1963年から1974年までは名古屋タイムズ社長を務めた人物である。10cm×7cmサイズの「名古屋豆本」を1967年から1990年まで刊行したことでも著名である。

また、医師の小谷剛は前述の通り作家でもあり、1949年上半期、自らが主宰する同人誌『作家』に掲載された「確証」で戦後復活した最初の芥川賞を受賞した。脱走兵を匿った体験をもとにした小説「あちらからきた人」を、同じく『作家』の1972年10月号で発表している。

岡田を脱走兵支援活動に引き入れたのは渡久地である。1963年の選挙の際、4月7日に出馬を決め、20日までにポスターを印刷しなければならない状況に困り果てて風媒社の稲垣に相談したところ、稲垣が紹介したのがオカダ印刷だった。それ以来の付き合いである。小谷への依頼について渡久地は、「あそこは岡田さんと私が二人で行ったんですよ。岡田さんが、橋渡しするけど、どういう条件でってことを全部説明せよということで行ったんです」と語っている [渡久地インタビュー]。

また岡田は、「ベトナム反戦と文学者」の中で、脱走兵支援に対する自らの考えを次のように記している。

私はしっかりと計画の見通しもないまま脱走を呼び掛けるのは誤りだと考えていたが、現実にはアメリカ空母イントレピッド号から帰休兵四人の脱走にはじまった救援活動で、実際に脱走兵の受け入れを依頼される事態となれば、方針に反対だからといって目をつむり、手をこまねていることはできなかった [岡田：1999]。

脱走兵支援に関わった者が口々に言う事であるが、日ごろ反戦平和を主張していても、いざ脱走兵を匿って欲しいと頼むと断る者も少なくなかった。異質な他者の出現は、自らを試すことにもつながったのであろう。岡田が同じ評論で語るように、「私たちの一見平凡な日常の生活も、いつどのような形で高度な政治的事件とかかわりをもち、それまでの平安が一挙に崩れるということがあるかもしれない」のである。

3-3. 脱走兵をいつ匿ったのか

脱走兵支援の実状は場所や時期、人の名前などを極力記録しないようにされたため、関係者の記憶により再現されるしかなかった。また全体を知りえる立場にある者をできるだけ置かず、各自が割り振られた役割を果たす形で遂行されたので、実態が見えにくくなっていることはすでに述べたとおりである。そうした中で、岡田は脱走兵に関わることを日記に書き留めていた。今回、岡田の日記を閲覧することができたのでその一部を転載したい。以下は、日記の中でも脱走兵に関する部分のみを抜粋したものである⁶⁾。

1968年

11月29日 渡久地くんより脱走兵組織の話あり

1969年

1月7日 夜、和合の家へ渡久地君くる。講演会のビラ納品。アメリカ兵のことで話をする

9日 渡久地君よりアメリカ兵のことで電話がある。

10日 夜 桑原恭子君宅へ、アメリカ兵のことで行く。1000円カンパもらう。

20日 渡久地君他三名来る。アメリカ兵の問題。

21日 ■■■■に■■■■■君たずねる。夜 水谷勇夫氏を自宅にたずねる。いずれもアメリカ兵のことで依頼

22日 ■■■君より昨日の返事あり。承諾とのこと。

24日 渡久地君 市政研の原稿もってくる。市政研前号と北小路講演会のビラ入金。アメリカ兵のことは1か月宿舎ができたとのこと。■■■・桑原君に電話。

28日 渡久地君より電話がある。

2月1日 大牧君より脱走兵援助カンパ5000円つく。現在森下圭二氏が預かっているという。

16日 警視庁はピストル不法所持の名目で、反戦脱走米兵援助技術委員会（ジャテック）関係の予備校生を逮捕、3か所を家宅捜査したとのこと。

3月4日 渡久地君と、脱走兵の問題で水谷勇夫氏、■■■■■君、小谷剛氏のところをまわる。

6日 稲垣喜代志氏より電話がかかる。

9日 昼ごろ■■■君宅にて打ち合わせ

夜 小谷宅から移動する。同行 諸戸君
ジョン・ハワード君 21歳・通信兵

10日 小谷剛氏にハワード君の礼の電話をする。

11日 ■■■君よりハワード君のことで連絡あり

16日 夜 ■■■■君宅へ行く。ジョン・ハワード君は、昨夜、稲垣、鈴木、村山氏らによって無事移動する。

4月2日 稲垣喜代志氏より電話がある。昨日交通事故にあつて鳴海病院に入院しているという。ジョン・ハワード君、今日東京へたつとのこと。

日記を見ると、岡田が知り得た限りではあるが現況が逐一記されている。脱走兵を匿うことは日本の法律では違法でなかったものの、米軍や日本の警察が目を光らせていたことは事実である。そのような中で記述を残すことは危険であると言えるが、しかしそのおかげで私たちは活動の一部を

垣間見ることができる。

記述によれば、1968年11月に渡久地から脱走兵についての話があり、実際に岡田が動き始めたのは1969年に入ってからであることが分かる。『となりに』では、各種の状況に照らして、「ブラウン [ジョー] は、早ければ脱走してすぐに、遅くとも1969年の1月はじめには名古屋に来ていた可能性が強い」と書かれているが、岡田の日記はその推察とも矛盾はない。

1969年1月10日に記載のある桑原恭子は、小谷の主催する『作家』の同人である。脱走兵をテーマとした小説「風の記憶」を同誌（1970年10月号）に掲載しており、作中では語り手の「私」が元同人仲間から脱走兵支援を相談され、逡巡する様子が描かれている。

1月21日にはある場所と名前が記載されているが、この人物は脱走兵を匿ったことの公表を望んでいないため、■と表記した。日記には実際の名前が記されている。

2月1日記載の「大牧君」とは、岐阜の郷土史研究者で小説家の大牧富士夫であろう。二人は『研究 中野重治』（神無書房、1974）という共著もある。またその日、医師の森下圭二が預かっているとも記されており、自分以外の協力者情報について共有しない方針だったわりには、ここまで情報が伝達されていたことはやや意外である。

3月4日には現代美術家の水谷勇夫の名前もある他、■で表記した人物と小谷のところを周ったとある。9日には小谷宅から■宅へ移動したと書かれているので、それまでの数日間を小谷が匿ったのであろう。そして9日から16日までの一週間、■宅で預かっている。

4月2日、ジョーは東京へ発つと記されている。ただし、『となりに』によれば、少なくとも東京のメンバーの手帳に1969年8月、9月、12月に名古屋に行ったことが記載されているといい、同書の編者は「1970年春頃までの間、ブラウンは何度か東京一名古屋を往復したようだ」と述べている。ジョーに長期間付き添った諸戸も「何となく断続的に、1年ちょっとやったかな、という気がします」と回想しており、4月の上京はあくまでも途中経過だと考えられる。

最終的にジョーは、良心的兵役拒否の申請による合法的除隊へと方針転換したジャテックの打診に従い、1970年6月23日、アメリカ全国キリスト者会議代表ホームー・ジャックに付き添われて横須賀基地に出頭した。これに対し稲垣が、「彼が隊へ帰るって話は知らされなかった。東京はけしからん」と怒っているとの話が『となりに』で紹介されており、筆者も今回の調査で間接的に同様の内容を耳にした。同書中で諸戸はそれに対して、「道が閉ざされたから彼は帰ることになった。身辺多少気をつけなさいよ」って連絡はあったと思うけどなあ」と語っている [関谷・坂元：1998、渡久地インタビュー]。こうしたエピソードは、運動の性格上存在した意思疎通の困難を想像させる。

4. おわりに

以上、名古屋における脱走兵支援をそのネットワーク構築を軸に概括してきた。そこから浮かび上がってくるのは、次のような状況である。

まず、名古屋での支援は医師・鈴木鋼二を中心として体制が整えられ、そこからさらに人脈を通じてネットワークが伸びていった。もちろん水面下で行われた活動であるから、知人伝いに広がっていくのは当然とも言えるが、しかし1969年8月から東京でジャテックが発行している機関誌『脱走兵通信』（1971年4月から『ジャテック通信』に改称）では、脱走兵を匿うための協力者を募集

してもおり、その案内を見た支援者が名乗りを上げることも十分に考えられた。また、『となりに』等で把握できる他地域での脱走兵支援のように、当該地域にいる東京ジャテック関係者の知人を頼るという手段もあり得た。しかし実際には、名古屋ではそれまでベ平連に関わったこともない者たちが（諸戸の場合は、岐阜ベ平連の設立に関係してはいるが）協力し、彼らを中心として脱走兵を匿ったのである。

なお、これらの活動に名古屋ベ平連に関わったかは不明である。場所の提供だけでなく紹介やカンパなど無数の多様な支援が存在したはずであるから、その中には名古屋ベ平連メンバーの寄与があった可能性もある。ただし、インタビューを含む今回の調査では、名古屋ベ平連の関与を示唆する情報はなかったことを付記しておく。

次に指摘しておくべきは、名古屋の協力者たちはその多くが、すでに何らかの「運動」に携わっていたことである。本稿で言及した通り、鈴木や渡久地はかつて共産党の運動に携わり、1969年当時は市政研を基盤とする活動をしていたし、村山は元県学連副委員長であった。稲垣は出版社、岡田は印刷業を軸としながら、様々な社会運動をサポートし続けていた。もちろん、運動経験がなくとも脱走兵を匿う場所を提供したり、カンパをした者も大勢いたが、中心人物らに運動経験とノウハウ、そして人脈といった資源が備わっていたことが活動を進める上で要となったことは間違いない。これは名古屋における脱走兵支援の一つの性格だと言える。

東京以外での脱走兵支援に関する研究がないので十分な比較はできないものの、例えば地域ベ平連と比べると、その違いが明確になる。ベ平連の場合、「ふつうの市民」の自発性に基づくことを特性としており、それまで政治や運動に関わることのなかった学生や市民が、ベ平連に参加する中で地域の問題に目を見開かされていったというケースがよくある。そして、新たな運動を展開する形に変化していくのである。例えば、基地のある山口県岩国市では反戦喫茶「ほびっと」が開店されたし、神奈川県相模原市では米軍相模補給廠基地の輸送車通行阻止のための闘争にベ平連メンバーも参加するようになった。また、入国管理事務所を擁する神戸のベ平連こうべは、次第に在日外国人の差別・抑圧問題に注意を向けるようになり、入管闘争に取り組むようになるのである〔平井：2005、黒川：2015〕。こうした事例と比べると、名古屋で脱走兵支援に関わったのは初めから地域の問題に取り組んでいた者たちであったことが鮮明になるのである。

最後に、脱走兵支援の〈語られなさ〉について言及しておきたい。この活動は記録がほとんど残されていないため実状を知るのが困難であるが、それとは別種の困難も存在している。それは、関係者において〈語りたくない〉姿勢が見られることである。その理由を当事者が語るわけではないので定かでないが、複数人から筆者に寄せられたインタビューへの断りの返信や、インタビューに応じていただいた別の関係者の発言などから推察する限り、支援活動そのものが嫌な体験・記憶であったり、違法でないとはいえ後ろめたさがあるため現在でも公言することに不安があったりするようである。また、当時も内密にしていたことなのだから、そうした記憶は墓場まで持つていくのがいいという美学を持っているケースもある。

〈語らない〉ことを批判しているのではない。最後にこうしたことに触れるのは、本稿の限界を示し、語られなかった出来事の余白を残しておくためだ。もちろん脱走兵支援に限らず無数の〈語られないこと〉によって歴史は（再）構築されるのであるから、今さら特筆すべきことではないとも言える。しかしながら、この活動を論じる際には一寸触れておかねばならないと考えた次第であ

る。国家の及ばないところに脱走兵というものがあるとすれば、制度的歴史記述とは異なる在り方でこの物語は紡がれてよいだろう。余白は埋められることがあるかもしれないし、その日はやってこないかもしれない。

【インタビュー・リスト】

- 佐々木康之 2016年10月7日、京都駅飲食店にて
 渡久地政司 2014年11月5日、高蔵寺駅喫茶店にて
 2016年4月22日、名古屋市内飲食店にて
 その他、メール・手紙による複数回のやり取り
 西寺雅也 2016年3月7日、高蔵寺駅喫茶店にて
 諸戸信彦 2016年4月22日、名古屋市内飲食店にて

【参考文献】

- 愛知県編（1985）『愛知県労働運動史 第3巻』、愛知県
 阿奈井文彦（2000）『ベ平連と脱走兵』、文藝春秋
 岡田孝一（1999）『中部の戦後文学点描』、中日新聞社
 黒川伊織（2015）「ベトナム反戦から内なるアジアへ——ベ平連こうへの軌跡」出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』、法律文化社
 鈴村鋼二（2017）『マルクスとヒポクラテスの間—鈴村鋼二遺稿集』、風媒社
 関谷滋・坂元良江編（1998）『となりに脱走兵がいた時代——ジャテック、ある市民運動の記録』、思想の科学社
 高橋武智・岩間優希（2015）「越境による抵抗、あるいは抵抗のための越境——高橋武智氏に聞く」『アリーナ』18号別冊、中部大学国際人間学研究所
 平井一臣（2005）「戦後社会運動のなかのベ平連——ベ平連運動の地域的展開を中心に」『法政研究』71（4）、九州大学法政学会
 平田雅己（2017）「1968年、あるいは1960年代と関連させて、ベ平連・ジャテックの運動を再考する」『「1968年」の意義に関する総合的研究——「時代の転換期」の解剖』、南山大学地域研究センター
 藤森節子編（2004）『老パルチザンのあしあと——岡田孝一の記録』、梨花工房
 「稲垣喜代志 そよ風に託して15 脱走米兵をかくまう」『朝日新聞』、2013年12月7日朝刊、朝日新聞社
 「名古屋の出版社「風媒社」創業 稲垣喜代志さん引退」『中日新聞』、2017年10月20日朝刊、中日新聞社

【注】

- 1) JATEC: Japan Technical Committee for Assistance to U.S. Anti-War Deserters（反戦脱走米兵援助日本技術委員会）。
- 2) ちなみに、佐々木が「そこにもう一人、際立ったのがいて」と言ったのが、河合塾の名物講師として活躍した牧野剛のことである。
- 3) 2017年10月28日に亡くなった稲垣が最後に編集した著作は、『マルクスとヒポクラテスの間——鈴村鋼二遺稿集』（風媒社、2017年）であった。
- 4) 筆者は別の用件で風媒社を訪れた際に稲垣と言葉を交わしたことがあるが、脱走兵支援については尋ねても語ることはなかった。
- 5) 諸戸は『となりに』では「室田」という仮名で登場するが、現在は本名を出すことを了承している。
- 6) 岡田の日記を、配偶者である藤森節子に閲覧させてもらうことができたが、改めて筆写に何うことを約束した後、藤森が亡くなった。後日、ご遺族と藤森の友人である高田保氏の協力により筆写が実現した。記して感謝したい。

A History of Citizen Assistance to US Deserters in Nagoya during the Vietnam War

Yuki IWAMA

Abstract

This paper examines how Japanese citizens in Nagoya formed a network to assist and shelter American deserters from the Vietnam War. In the 1960s, some Japanese intellectuals who lived in Tokyo started to assist deserters as a part of the antiwar movement; this assistance then spread out across Japan. However, there have been no documents or studies about the phenomenon in regions outside Tokyo. In interviewing people who provided this assistance in Nagoya and clarifying their backgrounds and characteristics, I found that their assistance expanded through personal relationships or friendships. Before then, most of them had not had a lot of involvement in the anti-Vietnam War movement but they did have considerable experience taking part in social movements concerned with regional problems. Their knowledge and connections were useful in providing assistance to deserters.